

実践と研究の記録

令和2年度

さしわだ

第39号

大阪府立岸和田支援学校

# 目 次

I. 実践報告		
『視線入力装置をコミュニケーション学習の教材として活用した取り組み』	野中 純子	・・・ 1
『「楽スタ」 指導後の変化について』	小浦 亜由里	・・・ 6
II. 人権研修		
『人権研修 ～「教員間のパワハラ」～』	小浦 亜由里	・・・ 10
III. 学部研究		
小学部研究		・・・ 14
中学部研究		・・・ 20
高等部研究		・・・ 28
IV. テーマ研修会		・・・ 34
V. 校内教材交流会		・・・ 36

付録：校内研修実施報告（表）

## I. 実践報告

### 視線入力装置をコミュニケーション学習の教材として活用した取り組み

野中 純子（自立活動研究部）

■要旨：本研究は、言語障がいを有し、振戦による上肢の震えのため文字の筆記や AAC 機器による文字入力が難しい生徒に、視線入力装置を使用してコミュニケーション学習を実施した指導事例である。

■キーワード：視線入力装置、文字入力、スイッチ

#### 1. はじめに

近年、ローコスト視線入力装置の登場により、視線入力装置の教育や福祉現場での活用が広がっている。本校でも平成 31 年度に視線入力装置（トビーPCEye Mini・Eye Tracker 4 C）を購入し、重度の障がいを有する児童生徒へのコミュニケーション指導に導入することになった。

取り組みの方法として、自立活動専任教諭が中心となり、自立活動の時間の指導及び全校児童生徒を対象とした抽出指導（週 2 時間）の時間を利用して、言語によるコミュニケーションが困難な児童生徒について指導を実施した。指導内容として、まず視線履歴からどのような見え方をしているのか、それによりどのように教材を提示すれば良いのかというアセスメントとしての利用が考えられた。例えば片麻痺の児童生徒の視線履歴を見ると、健側に視線履歴が集中し、麻痺側を見ることができていないことがわかった。写真カード等を並べて二者択一で選択させる場合、二枚の写真カードを左右に離して提示すると麻痺側を見落としている可能性があることが予想された。写真カードを離さずに並べて提示する配慮が必要であることや、麻痺側に意識を向けるために、あえて教材や給食時間中の食物の入った食器を麻痺側に置いて探索するように仕向ける指導へもつなげることができた。

また、表出言語を持たず上肢を操作することが困難な重度の児童生徒が、2 つのものを提示されたときに欲しいものに視線を向けて意思伝達し、それを教員が読み取ることは授業の中でよく行われていることである。このような見る力・見比べる力を高めるために視線入力装置を使った指導も試みた。パソコンの画面になかなか集中しない児童生徒も多く、視線を向けると画面に変化が起こることへの気付きが困難な場合がある。このような児童生徒には、抱っこスピーカーを利用し、画面に目を向けると風船が割れたり動物が鳴いたり楽器から流れる音が、スピーカーから振動としてダイレクトに体に伝わるようにした。児童生徒の中には、刺激として振動を好む児童生徒も多く、風船の割れる音とともに大きな振動が伝わると、声を出して笑いながら楽しんで取り組める事例が複数みられた。パソコンの画面をずっと見続けることができない児童生徒に対し、見ることへの変化の気付きだけでなく、画面に集中して取り組む効果もあることがわかった。見続けると楽しいことが起こるという体験が、人とのやり取りの中で

活かされて、好きなものを視線で選択できることにつなげていけるように継続して取り組んでいる児童生徒も多い。

他にも、言語障がい有し、文字を理解しているにもかかわらず上肢の操作が困難で筆記や AAC 機器による文字入力できない児童生徒に対し、コミュニケーション手段の一つとして視線で文字を入力する指導にも取り組んでいる。ここでは、平成 31 年度 9 月より文字入力に向けて指導をはじめ、成果のあった中学部女子生徒の指導実践を事例としてあげる。

## 2. 対象生徒の実態

本校中学部に昨年度入学してきた中学部 2 年生の女子。事故の後遺症により右半身が麻痺し、車いすを使用。舌・口唇・顎等の口腔の細かな速い動きが困難であった。そのため発声は一音一音ゆっくりとした発声で、尚且つ舌の挙上や口唇の閉鎖が不十分なため不明瞭な音もあり、聞き取りにくく意思伝達に時間を要する状態であった。また上肢を使おうとすると、自分の意志に反して手が震えてしまう振戦の症状があり筆記が困難で、小学校の時には、担任教員と指文字で会話していたようであった。本校入学後は発声とともに指文字を使いながらも、指文字を知らない教員に対しては補助的に 50 音表を使った意思伝達をしていた。しかし、すぐに意思が伝わらないもどかしさから、ストレスを感じることも多いようであった。自立活動の時間の指導では、1 年生の 4 月から発声の明瞭性を上げるための構音指導を中心とした取り組みを実施していた。そして本校に視線入力装置が導入された 9 月より、構音指導と併行して、視線入力装置によるコミュニケーション手段の獲得を目標とした指導にも取り組むことになった。自分の思いを綴ったり他者へ手紙やメールを送ったり、高等部卒業後の生活を見通し、パソコンを視線で操作できることを長期の目標とした。

## 3. 指導内容

### (1) 学習目標と指導の内容

#### 【学習目標】

- ①発声の明瞭性を上げる。
- ②視線入力装置を使い文字を入力することができる。

#### 【指導内容】

- ①かるた等を使用した文章の読み上げ（マイクの使用やタブレット端末による録音・録画を通し自らの発声についてフィードバックをし、不明瞭な音に気付き改善する）。
- ②視線入力装置を使用し、神経衰弱ゲームやしりとりゲーム、50 音表を使って好きな言葉や文章を入力する。

### (2) 指導および経過

中学部 1 年生の 1 学期は、構音指導と併行しながら、携帯会話補助装置のひとつであるトーキングエイドを使用して、両親や祖母に手紙を書くなどの自分の思いを他者に伝える学習を実

施した。上肢の振戦からトーキングエイドでの文字の入力には時間を要したが、手紙を読んだ相手の喜ぶ反応が、本児にとって達成感につながり、コミュニケーション意欲を高めることにつながったと思われる。

2 学期に視線入力装置が導入されたので、まずは右麻痺という症状がどのような見え方になっているのかを知るアセスメントとして使用した。指導当初は視線入力ソフト「EyeMot 3D」の風船割りや射的に取り組み、視線履歴を分析した。その結果、右半分への視線の移動が困難であることがわかった(図 1)。また視線入力ソフト「SensoryEyeFX」の神経衰弱 (6 枚) を実施すると、左上から左下に開いて、右半分 (特に右下) が残る傾向にあった(図 2)。右のカードに視線を合わせて注視し、カードを裏返すことにも時間を要した。時には眼球を動かさず、頭を動かして代償しようとする様子もみられた。しかし、本児はゲームができることを楽しみにしており、授業では集中して取り組み、終了しても何回もしたががり、時には「ゲームがしたい」と自ら要望することもあった。



図 1 風船割り視線履歴

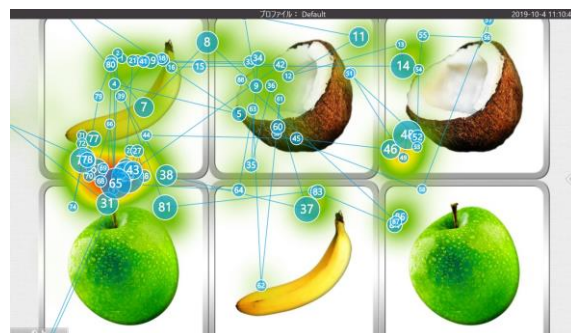


図 2 神経衰弱 6 枚視線履歴

その後、1 週間に 1 回の継続指導を実施するうちに 1 か月が経過した 5 回目の指導で変化が現れた。神経衰弱 (8 枚) を見せたところ、右上のカードから開き始めることができたのである。麻痺側の右側を意識でき、カードに視線を合わせ注視することができるようになり、全カードのマッチングまでの時間も日を迫うごとに速くなった。2 か月後には神経衰弱の枚数を 8 枚から 16 枚に増やすことができ、カードをマッチングさせるために左上のカードから右下のカードへと視線を移すことが可能となった(図 3・4)。但し、最後まで残るのは右下のカードではあった。

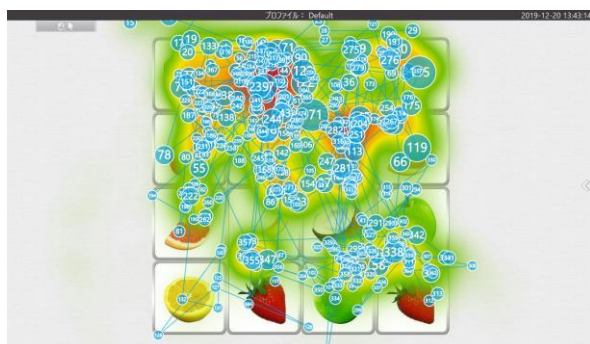


図 3 神経衰弱 16 枚視線履歴



図 4 神経衰弱を楽しむ様子

3学期には、神経衰弱に加えて50音表を使ったしりとりゲームを試してみた。しかし目標とする文字に視線をなかなか合わせることができず、全20問を解くことができなかった(図5)。一方、神経衰弱は16枚を合わせるのに4分~5分の速さですべてのカードをマッチングすることができ、1月末からは20枚とさらに枚数を増やして取り組んだ。

そして、今年度中学部2年生に進級したが、新型コロナウイルス感染拡大予防を受けた学校休業措置のため、自立活動の指導が再開されたのは6月下旬からであった。4か月ぶりの授業で神経衰弱16枚に戻して実施することとなった。しかし、左上のカードから裏返していきはしたものの、ゲーム中に右側を意識するように助言を入れることで右側を意識できるようになり、7月には4分前後で全カードをマッチングすることができた。

9月からは視線入力ソフト「EyeMot 3D」の神経衰弱20枚への取り組みと併行して、文字の入力を練習するために50音表を使ったしりとりゲームにも毎時間取り組んだ。このゲームは、画面上部に提示された一文字を50音表から視線で選択、注視で決定するものである。しかし、文字の入力は神経衰弱のカードよりも注視する範囲が狭くなるため、周囲の文字に視線が移りやすく、一文字入力するのに時間を要した。全20問を解けずに途中で中止してしまうこともあり、これまでよりも疲労感も増すようであったので、スイッチを併用することにした。文字の選択を視線で行い、決定を健側の左手でスイッチを押して行った。スイッチは大きな動作を必要とせず、手の中に納まり親指だけでスイッチを押せるフィルムケースを改良したものを使用した(図6)。また、あ行が右から始まる50音表を使用していたが、本児が左に視線を移しやすいことから、あ行が左から始まる50音表に変更して取り組むことにした。このスイッチの使用と50音表の変更により、文字の入力が短時間で可能となり、11月からは神経衰弱に変えて、50音表を使い、自分の名前や好きな言葉を入力する指導内容にも取り組めるようになった。12月には自分から入力したいと言って、大好きなアニメの登場人物の名前(10文字)に「だいすき」と付け加えた14文字を1分18秒で入力できるようになった(図7)。入力を終えた時の満足気で嬉しそうな表情がとても印象的であった。1月からは、この本児の気持ちをファンレター作成という形で授業に取り入れたいと考えている。



図5 しりとり:「かきく」の文字を注視することが難しい様子を表す



図6 フィルムケースを改良したスイッチ



図7 好きな言葉を入力する

## 4. おわりに

視線入力装置を使用したことで、今までできなかったゲームを楽しめたこと、そして文字を視線で楽に入力できるようになったことが、学習に対してモチベーションを上げることにもつながったようである。本児から「今日はこれをしたい」と学習内容について要望することもあり、毎時間楽しみながら主体的に取り組む姿勢がみられた。

できなかったことができたという体験は、視線入力の学習と併行して実施していた構音指導にも効果が見られ、毎時間の取り組みは意欲的であった。口腔のどのような動きが、発声を不明瞭にしているのかを学習し、それを意識して人と会話ができるようになってきた。あきらめずに何度も相手に伝えることができ、伝わることの喜びが本児の姿から見受けられた。昨年度入学時と比較すると発声の明瞭性が上がり、担任からも聞き取りやすくなったという言葉も聞くことができた。

今後は、手紙や日記・感想文等の作成を通して、自分の思いを文字に表すことに取り組んでいきたいと思う。また高等部卒業後の生活を豊かにすることを目標として、視線によるパソコンの操作ができるようになれば、一層本児の世界に広がり期待されるのではと考える。

## I. 実践報告

### 「楽スタ」 指導後の変化について

小浦 亜由里 （自立活動研究部）

■要旨：「重力軽減環境訓練システム」（愛称：楽スタ）の指導も9年目になった。今回、指導後の変化について報告する。指導前後の変化については、独歩だが歩容が不安定な児童や、介助歩行や歩行器での歩行が可能な児童生徒に対しては、1コマの授業での指導前後の変化が顕著であることが多かった。また、座位姿勢保持が不安定な児童生徒に対しては1年以上という期間を通しての継続指導で姿勢保持能力や運動面に変化が見られた。

■キーワード：楽スタ、低負荷・高頻度の環境、継続指導

#### 1. はじめに

楽スタ指導も9年目になった。小学部から入学してきた児童の中には、楽スタでの自立活動を9年間受けてきている生徒も在籍するようになった。小学部の年齢の学童期には運動能力が著しく発達する。しかし、運動能力がプラトーになる高等部の年齢であっても歩行能力が向上されることもあった。今回は、独歩であるが歩容が不安定な児童生徒、一人で座位姿勢保持が難しい児童生徒に対して楽スタの指導内容をあげて、指導前と後での変化について報告する。

#### 2. 楽スタ指導

##### (1) 1コマの時間の指導の前後の変化

表1 「1コマの時間の指導の前後の変化」

学部	姿勢状態	指導内容	楽スタ前	楽スタ後
小学部A	独歩	▶10m歩行 (三角コーンを目標にする)  ▶楽スタ立位 (20～25分間) (体を左右に揺らす) (その場足踏み)	▶タイム 21 秒。歩数 31。 ▶前足部を引きずって歩く。 ▶目標に向かって左斜めに歩き目標地点からは 60 cm ほどずれる。	▶タイム 19 秒。歩数 28。 ▶前足部が上がる。 ▶目標に向かって比較的まっすぐに歩行可能。  ▶歩行中、体の左右の揺れが減り姿勢が安定する。



表 1 について、10m 歩行では楽スタ指導前は、21 秒かかり、目標までまっすぐに歩行できず左斜めに進み、最終的には目標の三角コーンから 60 cm ほどずれてゴールした。また、歩数も 31 歩であった。楽スタ指導中では、立位姿勢を保持し、体を左右に揺らしたり、その場足踏みをして 20 分から 25 分間は継続して体を動かした。指導後の 10m 歩行では、タイムが 19 秒になり指導前と比べて 2 秒縮まった。歩数も 28 歩となり歩幅が広がっていることがうかがえた。

## (2) 継続指導から見える児童生徒の姿勢と運動の変化

表 2 「継続指導から見える姿勢と運動の変化」

学部	姿勢状態	指導内容 (週に 1 回)	楽スタを始めたころ	継続指導後 (1~3 年)
小学部 B	臥位	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽スタ立位</li> <li>【姿勢を保持できる時間内で実施】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>後方にフィジオロールを縦に置き、少し腰掛ける感じで立位する。</li> <li>下肢にキーストンを装着する。</li> <li>片足が浮きやすく、下肢に荷重しない</li> <li>前方に昇降テーブルを置き上肢で体幹を起こす。</li> <li>ヘッドサポートを使用。</li> <li>立位保持時間は 5 分くらい経過すると腰が落ちて姿勢が崩れ始める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>フィジオロールを置かなくても立位姿勢を保持できる。</li> <li>両下肢の足底を床につけて立位保持できる。</li> <li>ヘッドサポートなしで頭部を保持できる。</li> <li>立位保持時間は 20 分間保持可能になる。</li> </ul>
中学部 C	座位	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽スタ立位 (20~25 分間)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>後方にフィジオロールを縦に置き、少し腰掛ける感じで立位する。</li> <li>下肢にキーストンを装着する。</li> <li>自発的に体を前後に揺らす。指導時間内で数えられるほどの回数。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>フィジオロールを置かなくても立位できる時がある。</li> <li>キーストン無しで立位可能になる。</li> <li>前後の動きが大きくなり、動かしている時間も増え多いときは、指導時間内はずっと動いている。</li> </ul>
高等部 D	独歩	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽スタ立位 (30 分間)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>静止立位は難しい。</li> <li>独歩だが体幹のぶれが大きい。</li> <li>体重計では体を静止できず計測できない。</li> <li>野球のバッティングスイン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体幹のぶれが軽減される。</li> <li>体重計で計測可能になる。</li> <li>両下肢での踏ん張りが可</li> </ul>

			グでは下肢で踏ん張れず、 体幹が安定しない。	能になり、強いスイングが でき、スイング後も体幹が 安定している。
--	--	--	---------------------------	---

表2について、小学部Bは指導当初は、後方にフィジオロールを置いて、軽く腰掛けるようにしないと両膝が屈曲し体幹を保持することができなかった。

また、両下肢にキーストンを装着して膝の伸展を助けた。頭部に関しては、保持することが困難であったためヘッドサポートをつけた。立位保持時間も5分間ほどすると姿勢保持が難しくなり、体幹が前傾し姿勢が崩れていた。3年間の継続指導で、フィジオロールを置かなくても立位姿勢保持が可能となり、また、ヘッドサポートなしでも頭部保持が可能になった。そして、立位保持時間も20分間可能となり当初よりも15分間も伸びた。

中学部Cは指導当初は、後方にフィジオロールを置いて、軽く腰掛けるようにして立位姿勢を保持していた。両下肢は屈曲位で体幹を支えることが困難であったのでキーストンを装着した。普通の学校生活では自発的な動きは少なかったが、楽スタで立位をとるや自発的に体を前後に揺らし始めた。1年半の継続指導で、フィジオロールなしでも立位保持できるときも見られるようになった。また、両下肢のキーストンなしで体幹を支えることができるようになった。そして、自発的な体の前後の動きも大きく動かすようになり、時には指導時間内ずっと動かしていることもあった。

高等部Dは指導当初は、歩行中には前後・左右の体のブレが大きかった。体重の計測では静止できずにエラー表示が出ていた。バーチャルゲームで野球をしていたが、攻撃時のバッティングでは、スイングするたびに両下肢での踏ん張りがきかずにふらふらして姿勢が崩れていた。当然、スイングも弱く、スピードも遅かった。1年間の継続指導で、歩行中の体のブレが軽減し安定して歩行できるようになり、体重計での計測ではエラー表示がでることなく計測可能となった。

また、バーチャルゲームでは、両下肢で踏ん張れるようになったことから、強く速いスイングができるようになり、スイング後も体幹がふらふらすることなく安定するようになった。

### 3. 指導から見えてくること

楽スタでの指導は1コマの指導であっても継続指導であっても指導前後で比較すると、姿勢や姿勢保持時間、歩行等に関する運動能力の向上が見られた。

継続指導することによって、本人も姿勢保持することや動くことに対して慣れてきて自発的な動きも増え体を前後や左右に揺らしたり、その場で足踏みをすることも見られるようになった。

一時的な指導後の変化が、継続することによって自分のものとして獲得することが可能になり、その結果、立位姿勢保持時間が伸び、歩行能力やそのほかの運動能力の向上につながっている。

## 4. まとめ

楽スタは体重を免荷し、不安定ながら制御された環境を設定することで姿勢を保持し動きやすくする装置である。そして低負荷・高頻度の運動が体の深層部にある筋肉のトレーニングには効果的であるといわれている。

最近では、体重を免荷した運動療法の効果報告が少なくない。例えばパーキンソン病や脊髄損傷、脳卒中の患者に免荷トレッドミル歩行をした後の歩行機能回復を獲得し得ることが明らかにされている。さらに重症心身障害児者に楽スタ立位を5分間実施し、指導前後で股関節屈曲・外転・外旋や膝伸展の可動域を測定すると明らかに改善されている報告があり、変形・拘縮の進行予防を可能とする訓練効果が期待できる。

したがって楽スタでの指導環境は、本校の児童生徒のような麻痺性や筋力の弱い肢体不自由児には最適な指導環境であると思われる。継続指導により、立位姿勢保持能力や歩行能力が向上し、たくさんの成功体験を積むことで、自己肯定感を育み次の運動機能を獲得することができる。

また、運動能力ではないが、「風邪をひかなくなった」「体調が安定してきた」「排便がよくなった」「授業中の笑顔が増えた」ことも児童生徒の変化としてとらえると、継続指導の大切さがうかがえる。1コマの授業の指導前後での変化はわかりやすいが、継続しなければ一時的なもので終わってしまう。

児童生徒の運動能力の維持・向上に生かすためにも楽スタを指導できる教員は積極的に楽スタを活用してほしい。そしてチーム岸和田一丸となって、深化・創造した楽スタの取り組みを進めていきたい。

### 引用・参考文献

- 1)今川忠男：脳性まひ児の24時間姿勢ケア、三輪書店、2006
- 2)第50回日本理学療法学会大会(東京) 0-0843 体重免荷時の自動介助運動が重症心身障害者の下肢筋活動と関節可動域に及ぼす影響
- 3)新しい医学の進歩 免荷式歩行トレーニングとCPG 日本医学会分科会 2006

## Ⅱ. 人権研修

### 人権研修 ～「教員間のパワハラ」～

小浦 亜由里（人権教育委員会）

■要旨：「教員間のパワハラ」というテーマで鳴門教育大学教職大学院教授の阿形恒秀先生に講演を頂いた。

講演では、教員の共同性を考える視点として、「両側から考える」ということを話されており、これは、物事に関して一方向からだけ見るのではなく、反対側からも見ていかないと偏った答えが出てしまうということであった。

ほかにも、いじめや体罰、虐待との共通点を例に挙げて、パワハラ問題につなげてわかりやすく講演して頂いた。

■キーワード：教員の共同性を考える視点      リーダーシップ      権威      フォロワー

#### 1 実施日程と対象

- (1) 日時：令和2年8月28日 金曜日
- (2) 場所：本校
- (3) 講師：鳴門教育大学教職大学院 阿形恒秀教授
- (4) 対象：本校教職員


#### 2 内容と資料

- (1) 内容
  - ・ 教員の共同性を考える視点として、それぞれの立場から考えることが大切である。なぜならば、一方向からだけ見てしまうと、正確に把握できなくなってしまうからである。
  - ・ 反抗することは、甘えの裏返しである。
  - ・ 関係性における暴力については、上司のパワハラと共通点がある問題である。愛と憎しみはコインの裏表の様な関係である。
  - ・ 海堀あゆみ（なでしこジャパンのGK）は「ゴールは一人で守れない。」と発している。この言葉は、生徒は一人では支えられない、学校は一人では動かせない、人は一人では生きていけない、ということにも通じている。
  - ・ 人間は心の底から困難なことにぶつかると、思考停止する。
  - ・ アドルフ・アイヒマン（ナチスドイツ時代、ゲシュタポのユダヤ人移送局長官でアウシュヴィッツ強制収容所へのユダヤ人大量移送に関わった）を例にあげて、権力化における個人の正義の実践の困難さ、そのような状況下に置かれても冷静な判断力を保ち「おかしい」「いやだ」と声を上げることの重要性を示している。

(2) 資料

教員の協同性を考える視点

両側から超える



シナジー (Synergy、協働作用)

協力した活動では、  
一人では決して思いつかなかった  
アイデアが出たり、  
自分だけだと抜けられなかったところから  
大きく踏み出せたり、  
グループの相互作用の中で、  
大きな力が生まれてくる。

中野民夫 (2001)「ワークショップー新しい学びと創造の場ー」

関係性における暴力

見知らぬ他人の犯罪・非行と区別すべき  
上司のパワハラと共通点のある問題

↓

- ◆ 児童生徒間のいじめ
- ◆ 夫婦間のドメスティック・バイオレンス
- ◆ 親の児童虐待
- ◆ 担任・部顧問などの生徒への体罰

藤岡淳子編著 (2008)「関係性における暴力」

いじめ・体罰・虐待との共通点を念頭に置き  
パワハラ問題を考えると…

親密な人間関係における暴力への対処を  
複雑にしているのは、  
それらの関係性が必ずしも暴力ばかりではなく、  
親しさや相互依存といった、  
より分けるのが不可能な可能性をも  
包含しているからであろう。

藤岡淳子編著 (2008)「関係性における暴力」

いじめ・体罰・虐待との共通点を念頭に置き  
パワハラ問題を考えると…

暴力行動が認められたからといって、  
その行為者に、  
ただちに邪悪な意思あるいは  
邪悪な人格を想定することは  
見当違いになりやすい。

藤岡淳子編著 (2008)「関係性における暴力」

いじめ・体罰・虐待との共通点を念頭に置き  
パワハラ問題を考えると…

加害者を糾弾し、厳罰に処し、  
彼らを排除していくことで  
問題が解決に近づくとは到底思えない。

藤岡淳子編著 (2008)「関係性における暴力」

支配型・強権型リーダーシップ

支配型・強権型一辺倒では、  
10番にはなれても1番には絶対になれない

フォロワーの能動性・自主性を奪うので、  
ある限度を超えると伸びしろがなくなる

平尾誠二 (2015)「求心力」

サーバント型リーダーシップ

自由度が高く、快適で  
モチベーションも保ちやすい

リーダーとフォロワーが近すぎてフラット化し、  
緊張感が失われ、組織が弱体化してしまう

平尾誠二 (2015)「求心力」

## 巻き込み型リーダーシップ

リーダーシップの質は  
「求心力」のレベルの高さと言っている

おのれの求心力をもとに  
周囲の人間を巻き込んでいくリーダーシップ

平尾誠二(2015)「求心力」

「強いリーダーシップ論」によって  
損なわれる危険性があるものは…

教員の主体性  
教員の責任性  
教員の協働性  
教員の自負  
学校の歴史・伝統・物語

## 権威とは

《いうことをきく》ということと  
《いうことをきかせる》ということは反対語のようだが  
どうではなく、前者は権威に、  
後者は権力に關係している。  
権威とは、  
権威をもっているといわれるものの中ではなく、  
権威を感じるものの内部にあるものが  
投射されたものである。

なだいなだ(1974)「権威と権力」

## 権威とは

真の権威と偽の権威との差は、その根源がどこまで  
その人の存在とかがかかっているかによって区別できる。  
地位や名声や金力などによりかかっているときは、  
それは偽ものである。  
環境の変化によって取り去られる可能性のあるもの、  
それらをすべて取り去ったとしても  
残る権威が本ものである。

河合隼雄(1983)  
「大人になることのむづかしさ - 青年期の問題 -」

## 力愛不二

愛のない力は暴力であり、  
力のない愛は無力である。

リーダーによる  
「フォロー理解」の大切さ

フォロワーによる  
「リーダー理解」の大切さ

## 若い先生方に望むこと

パワハラへの異議申し立て

意味のある「負荷」まで  
拒絶してしまうことに留意



## リーダーは

学んで世の人の師となり  
行いて世の人の範となる

## フォロワーは

謙虚に師の範に学び  
師を超えて新たな範を拓いてゆく

### 3 まとめ

「教員間のパワハラ」というテーマは、重く感じたが、講師である阿形先生の講義が、聞き入りやすく、また、わかりやすかったので、時間のたつのも忘れて聞くことができた。

研修後のアンケートの自由記述では、肯定的な内容が多く見受けられ、有意義な研修会であったと感じられた。

## Ⅲ. 学部研究

### 小学部

#### 1. 研究の趣旨とテーマについて

2年目となる全校テーマ「子ども一人ひとりの実態を小学部から高等部でとらえ、未来に活かす力を育む」を踏まえ、小学部の実態に基づいて今年度も「“できた”“わかった”を実感できる授業づくり」を研究のテーマとし、実施した。今年度は、低・中・高学年で「自立活動（たいいく）/体育」の授業を設定し、系統立てた指導のための取組みも検討できるようにした。加えて、例年通り、授業研究、ビデオによる授業参観、学習指導案などをもとに研究討議を行ない、テーマにそった授業のねらい、児童の実態に応じた教材の工夫や指導の仕方、授業の展開など、授業の改善および授業力の向上をめざした。授業研究の際には〔岸和田支援学校授業観察票〕を使用し、見学者は授業を評価した。その評価のまとめや授業者の意見も踏まえながら研究討議を行った。

#### 2. 内容と方法

##### （1）学習指導案の作成

例年通り、学習指導案は、授業の担当者のみが作成するのではなく、授業にかかわる学年団（隣接学年）の教員で十分に話し合い、ひとつの授業をつくり上げることを目標とした。

##### （2）授業の公開

対象学年は授業の公開と学習指導案、ビデオの提供をする。授業の見学者は〔岸和田支援学校授業観察票〕を使用し、授業の評価をする。

##### （3）研究討議

2学期に高学年と訪問生を、3学期に低学年と中学年の授業のビデオと〔岸和田支援学校授業観察票〕による評価のまとめを読み合わせながら「“できた”“わかった”を実感できる授業づくり」の視点から研究討議を行った。

##### （4）振り返り及び授業の改善や授業力の向上

質疑応答や研究討議を行った後、授業の改善や授業力の向上に役立てる。また、学習指導案の書き方や児童の実態に応じた教材・教具の工夫、支援の手立て、チーム・ティーチングなどについても再確認し、小学部教員の共通理解を得て、教員の資の向上を図る。

#### 3. 小学部授業研究

高学年と訪問の授業研究が実施済みである。訪問は、訪問の授業内容を知ってもらったこともねらいに「自立活動（おんがく）」で授業研究を行った。今回は高学年の「自立活動（たいいく）/体育」の授業研究と研究討議を通して、児童の実態に応じた教材・教具や授業づくりの工夫などについて再確認したことを掲載する。



# 小学部 5・6年（自立活動（たいいく）/体育）科学習指導案

## 1 単元（題材）名

果物狩りに GO!!

## 2 単元（題材）の目標

（たいいく）

- ・様々な動きのある活動を行う中で、自ら身体を動かして取り組む。
- ・活動に取り組む中で、「できた」嬉しさや楽しさなどの気持ちを自分なりに教員に伝える。
- ・教員の見本や言葉かけに合わせて楽しく身体を動かす。

（体育）

- ・活動の流れを理解し、様々な動きに自ら取り組み、ボディイメージを高める。
- ・活動に取り組む中で、「できた」嬉しさを言葉などで表現したり友だちを応援したりする。
- ・教員の合図や指示、決まりを意識し、楽しく運動する。

## 3 指導に当たって

### （1）教材（題材）観

5・6年のたいいく/体育では、年間通じてインターバル走とラジオ体操に取り組んでいる。活動量の保障や PC-W、SRC-W などでの歩行活動の確保をしたり全身を使った運動に取り組んだりして単元の活動につなげている。

『果物狩りに GO!!』は、果物に見立てたボールを収穫するという設定で活動に取り組んでいる。横転をしたりトンネルをくぐったりして果物園に行き、天井からぶら下げたボールを取り、逆さに吊るした傘に入れる。サーキット形式で、ストーリー性のあるものにするすることで、児童は果物狩りに行くという見通しをもち、意欲的に取り組めると考え設定した。また、横転・よつ這いでくぐる・ベンチ座位・ボールを取る・ボールを入れるという様々な動きを取り入れることで、身体を動かすことを楽しみ、自ら身体を動かしたり、自分の身体を意識しボディイメージを高めたりしてほしいと思設定した。

教材のボールは、風船にガムテープを巻き付け取っ手をつけることで、両手でつかんで取ったり取っ手を握って取ったりと児童の実態に合わせて取ることができるようにする。吊るす傘は、透明のビニール傘にするすることで、ボールが増えていく様子を児童が視覚的に捉えやすいようにする。また、ボールと傘を天井から紐やゴムで吊るすことで、児童に応じて高さを変えられることができ、目的の物に手を伸ばすことが課題の児童からボールや傘の高さに応じて背伸びやジャンプをして取ったり入れたりすることが課題の児童までが取り組めるようにする。トンネルをくぐる活動では、様々な大きさのトンネルを用意し、児童に応じてよつ這いだけでなくほふく前進でくぐったり、よつ這いで進むことが難しい児童はキャスターを使ってくぐったりできるようにする。

### （2）指導観

指導にあたっては、この単元を通してボディイメージを高め、できたという達成感を持つことを大事にしたい。そのため、ボールを取ったり傘に入れたりする活動では、児童がやり遂げた達成感を持つことができる高さにボールや傘を設置する。自ら身体を動かすことが課題の児童には、ボールや傘に手を伸ばしやすい位置や高さに配慮し、児童の実態に応じて自らボールを引っ張ったり入れたりすることができる支援をし、自分でできた達成感を持つことができるように指導をしたい。

また、見通しをもって活動に取り組んでほしいため、活動の終わりが分かりやすい

ように、ボールを傘に入れた後は、友だちと手と手でタッチをしたり友だちに向けてベルを鳴らしたりし、友だちを意識できるようにもしたい。

#### 4 単元（題材）の指導計画（総時数 12 時間）

指導計画（全 12 時間／本時 9 時間目）

第 1 次<転がって果物狩りに行こう>	4 時間
第 2 次<くぐって果物狩りに行こう>	5 時間（本時 5 時間目）
第 3 次<果物狩り競争をしよう>	3 時間

#### 5 単元（題材）の評価規準

	A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
たいいく	・ボールや傘に手を伸ばし、ボールを取ったり入れたりしている。 ・自ら身体を動かして横転をしたり、よつ這いでトンネル内を進んだりしている。	・教員の言葉かけに、自分なりの方法で気持ちを伝えている。	・教員の見本や言葉かけを見聞きし、それに合わせて楽しく身体を動かしている。
体育	・ボールや傘の高さ、トンネルの大きさに応じて、身体を動かしている。	・言葉などで気持ちや感じたことを表現している。	・教員の合図や指示を聞き、それに応じて身体を動かしている。

#### 6 本時の学習（第 2 次 5 時）

(1) 小单元名（題目）

くぐって果物狩りに行こう

(2) 本時の目標

（たいいく）

- ・トンネルくぐりや果物狩りに自ら身体を動かして取り組む。【知】
- ・教員の見本や言葉かけを見聞きし、それに合わせて楽しく運動をする。【主】

（体育）

- ・ボールや傘の高さ、トンネルの大きさに応じて身体を動かす。【知】
- ・教員の合図や指示を意識し、楽しく運動する。【主】

(3) 準備・教材等

マット、キャスター、フィジオロール（青・赤・黄）、布団、トンネル（青・緑・黄・白）エアレックスマット、フープ、箱椅子、ロープ、スズランテープ、洗濯ばさみ、風船にガムテープを巻き付けたボール、ゴム、ビニール傘、笛、旗、ベル

(4) 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・支援のてだて	評価規準 【観点】（評価方法）
導入 (15分)	1. はじまりのあいさつ	MT:授業の始まりを意識できるように言葉かけを行い、MTに注目していることを確認してからあいさつをする。 ST:児童がMTに注目するように言葉かけをし、一緒にあいさつをする。	
	2. 本時の活動内容を知る	MT:活動内容を書いたカードを使用して説明し、活動に見通しをも	

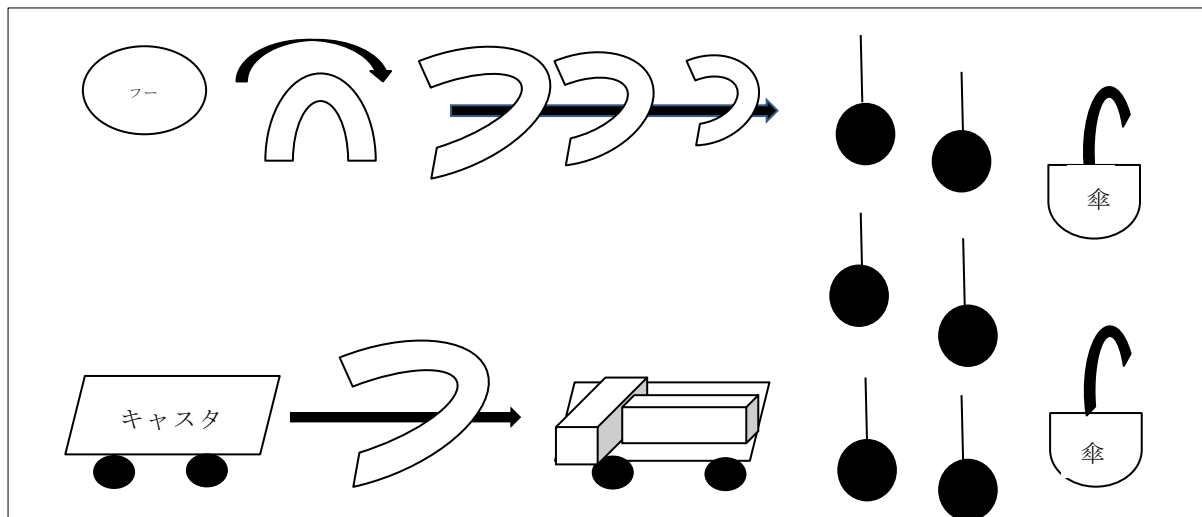
	<p>3. ラジオ体操</p>	<p>てるようにする。 ST:カードに注目するよう言葉かけ等を行う。</p> <p>ST:立位、介助立位、胡坐座位などそれぞれの児童に応じた姿勢をとる。 ST10:見本を見て取り組める児童は、MTの近くで取り組めるように場所に配慮し、必要な場合は言葉かけをする。 MT:大きな動きや言葉かけで児童が注目できるようにする。 ST1~9:身体を動かすことができるように、児童の実態に応じて支援する。</p>	<p>(た・体) ・教員の見本や指示を意識して、楽しく身体を動かしている。【主】</p>
<p>展開 (25分)</p>	<p>4. くぐって果物狩りに行こう (1) 見本を見る</p> <p>(2) 活動に取り組む ①山登り (G・Jのみ) ①トンネルくぐり B・C・F・G・J・M :よつ這いで進む</p> <p>A・D・E・H・I・K・L・N :フィジオロールが設置されたキャスターボードでよつ這い姿勢をとり進む</p> <p>②ぶら下がっているボールを取る C・G・J・:立位 B・M:介助立位 F:車いす A・D・E・H・I・K・L・N :キャスターボードでベンチ座位</p> <p>③取ったボールを傘に入れる ※姿勢は②と同様</p>	<p>ST9・6:児童に見本を見せる。 MT:頑張るところなどを指さしや言葉かけで伝える。</p> <p>MT:スタートの合図を笛と旗で伝える。 ST7・8:言葉かけなどで児童の活動を促す。 ST2~6:フィジオロールで緊張を緩めたり姿勢を保持したりできるように、児童の実態に応じて身体を支える。 ST9:トンネルを通っていることが意識できるように、スピードに注意してキャスターを引っ張る。</p> <p>ST1:児童がボールをつかんだり引っ張ったりしやすい位置にキャスターを動かす。 ST1・7・8:児童の実態に応じて、取るボールの高さを変える。 ST2~6:取るボールに注目できるように指さしや言葉かけを行う。 ST2~6:自らボールをつかんだり引っ張ったりできるように、実態に応じて支援をする。</p> <p>ST1:児童が傘にボールを入れやすい位置にキャスターを動かす。 ST1・7・8:傘を引っ張るなどして、児童に応じて傘の高さを変える。 ST2~6:傘に注目できるように指さしや言葉かけを行う。 ST2~6:自ら傘にボールを入れることができるように、実態に応じ</p>	<p>(た) ・トンネル内を進む間姿勢を保ったり、自ら身体を動かしてトンネル内を進んだりしている。【知】</p> <p>(た) ・ボールや傘に手を伸ばし、ボールを取ったり入れたりしている。【知】 (体) ・トンネルの大きさやボールや傘の高さに応じて身体を動かしている。【知】</p> <p>(た) ・教員の言葉かけを聞き、それに合わせて自ら身体を動かしている。【主】</p> <p>(体) ・教員の合図や指示を聞き、それに応じて</p>

		て支援する。 MT:一人ひとりの活動の様子や表情をフィードバックし、評価につなげたり児童の気持ちに共感したりする。	身体を動かしている。 【主】
まとめ (5分)	5. ふりかえり  6. おわりのあいさつ	MT:本時の活動内容を振り返り評価する。  MT:授業の終わりを意識できるように言葉かけを行い、MTに注目していることを確認してからあいさつをする。 ST:児童がMTに注目するように言葉かけをし、一緒にあいさつをする。	

(6) 教室配置等

(正面を上にして、児童(生徒)や教員、準備した教材・教具の位置、配置等を示す。)

<くぐって果物狩りに行こう>



フィジオロールが  
設置されたキャスター



トンネル



ボールと傘

研究討議では、(1)学習内容について(2)教材について(3)小学部の自立活動(たいいく)についての意見が上がり、活発な意見交換がなされた。

#### (1)学習内容について

友だちを意識するために、次の子にタッチする活動を取り入れたことで待ち時間が長くなり、運動量が少なかったため、一人の活動が終わる前に次の児童が出発しても良かったのではないかという意見が上がった。他の教員も児童の運動量を確保できる授業づくりに悩んでおり、授業開始10分前からインターバル走を取り入れることや、同じ教材を使用して学年(隣接学年)の中で自ら身体を動かすことができ運動量を確保する必要があるグループと自立活動的なことが目標の児童のグループに分けること、前半は児童の実態に応じてグルーピングし後半は合同で取り組むことなど、学年(隣接学年)の実態に応じて様々な形で取り組める工夫を確認した。

#### (2)教材について

児童の実態に応じてボールや傘の高さを変えられるようにした工夫は児童の“できた”につながったと思うが、ボールに果物感がなく、細長いボールをバナナに見立てるなど様々なバリエーションのボールがあれば、児童の実態に応じたボールを用意できたのではという意見が上がった。そんな中、教材は、どのような工夫をすれば児童が目標を達成できるかを考え作成することで、児童の“できた”につながるため、我々は児童が“できた”“わかった”を実感できる教材を準備する必要があることを確認した。

#### (3)小学部の自立活動(たいいく)について

自立活動を主とした教育課程の児童の目標が「手を伸ばす」など自立活動のような目標になることが多いことから、どのようなことをねらい、どのように1～6年で系統立てた目標を設定する必要があるのか悩んでいる教員がいた。系統立てた指導について深めることができなかつたため、低学年と中学年の授業研究の研究討議や教科会などで深め、来年度に体育のシラバスの完成を目指したい。

## 4. まとめ

授業研究及び研究討議は8回実施した(実施予定のものを含む)。

学部研究を通して、児童の実態に応じて様々な授業の形があること、児童が“できた”“わかった”を実感できる教材の工夫等が必要であること、各学年に応じた、又、隣接学年での系統立てた授業づくりが大切であることが確認された。指導案の書き方や授業の改善、授業力の向上を小学部の教員が意識していくためにも、授業研究及び研究討議は今後も必要だと考える。そのためにも、自立活動研究部主導で充実した学部研究を行っていく必要がある。

今年度の研究テーマ「“できた”“わかった”を実感できる授業づくり」については2年目の取り組みになる。シラバス作成にともなって、低・中・高学年ともに「自立活動(たいいく)/体育」の指導の柱①体づくり運動②感覚運動③器械・器具を使った運動④水あそびが整い、それに合った授業研究を行うことができた。来年度も系統立てた取り組みも部内での研究テーマとして、検証を重ねながらよりよい授業づくりや教員個々の授業力の向上などを検討していきたい。

## 中学部

### 1. 研究テーマと研究の方向性について

新指導要領において「主体的・対話的で深い学び」というキーワードが示された。さらに本校の研究テーマが本年度より「子ども一人ひとりの実態を小学部から高等部でとらえ、未来に活かす力を育む」となった。それらをとらえて、中学部においても新しい研究のニーズが求められている。そこで、中学部のテーマを「子ども一人ひとりの実態をとらえ、対話的・主体的で深い学びをめざした授業づくり」とした。また、中学部においては教科と発達段階に応じた指導が求められる。従前には発達段階に応じたグループで、中心となる授業の研究授業を行う方法であったが、対話的・主体的・深い学びの3つのグループで共通の認識を持ち、新時代に対応した教材・教具等を含み、授業方法を前向きに探ることを中心課題として取り組んだ。

具体的には次の3つのグループで前年度の課題を決めて研究を行なった。

前年度のグループの研究は以下のとおりである。

- 1 グループ： 主体的な授業作りをめざして、xR（様々なリアリティー：VR、AR、MRの総称）を活用した自立活動について研究を行った。
- 2 グループ： 対話的な授業作りをめざして、訪問の生徒と本校を結び、遠隔授業やバーチャルリアリティーを取り入れた授業について研究を行ない、対話的な学習や経験の拡充を諮った。
- 3 グループ： 「ディープラーニング」をめざして、ICT活用により、視覚・聴覚支援を行い、より理解を深める授業づくりを行なった。

### 2. 今年度の重点研究

前年度は上記3グループにおいてグループ研究を実施したが、中学部の生徒減により、教員数も減り、3つのグループ編成は難しくなったことに伴い、1グループと2グループを合併して、「主体的・対話的」な授業づくりをテーマとした。また3グループは継続して、「深い学び（ディープラーニング）」をテーマとして取り組んだ。

### 3. 公開授業研究

今年度もそれぞれにおいて研究授業を実施し、「深い学び（ディープラーニング）」グループにおいては、中学部1年生の「特別活動」で研究授業を実施した。本校の他の授業では発達段階にあわせたグループ編成で授業を行っているが、「特別活動」においては学年単位での授業を行っている。従って、発達段階の異なる生徒が一つの課題の中で授業を行うことになり、同じ課題では生徒の発達段階にあわせて生徒一人ひとりにあわせた課題設定は難しくなる。そこで、生徒一人ひとりにあわせ、より深い学びのためにはよりきめ細かな工夫が必要となるため、今回は「特別活動」の授業を授業研究として取り組んだ。「深い学び（ディープラーニング）」グループの指導案は次の添付の通りである。

## 「特別活動」(学級活動) 学習指導案

1. 日時 令和2年12月X日(X) 第6時限(13:20~14:05)
2. 場所 中学部2・3番教室
3. 学部・学年・組 中学部 1年1組 男子4名 女子2名 計6名
4. 単元(題材)名 「年賀はがきを作ろう！」
5. 単元(題材)目標

- ・紙すき工程を分担し、共同で作ることにより自分の役割や責任を育てる。
- ・活動の中で教員と一緒に作ったり完成した作品を鑑賞したりすることで、他者と関わりを持つとする。
- ・自分で選択した色を用いた作品を完成させ、達成感を感じる。

### 6. 生徒観

本学年には通学籍6名と訪問籍2名の生徒が在籍している。6名は車椅子や歩行器を使って移動する。健康面では、てんかん発作のある生徒や医療的ケアが必要な生徒も含まれる。授業面では、積極的に自分から活動をしようとする生徒が多い。言葉の指示で理解することが難しい生徒も多いが、見本を見せたり図や絵で示したりすることで理解できる生徒もいることから、視覚支援・聴覚支援を利用して活動の内容を理解し興味を持って取り組めることが課題である。

普段の生活の中で、役割や責任を持って行動をする機会が少ない生徒が多い。よって、みんなで分担をし、制作をすることで役割や責任を持つことが課題である。また、授業を通して、自分の好きなものを選択し、自己決定や自己選択をする機会を設定したい。

### 7. 教材観

「紙すき」という作業は、「紙をちぎる」「ペットボトルやミキサーに紙を入れる」「ペットボトルを振る」などの作業を工程ごとに分けられる。また、単に半紙を溶かして紙をすくだけでなく、好きな色を自分で選ばせる自己決定や自己選択の機会を設けることもできる。

本単元で年賀はがき作りに設定した理由として、時期を絡ませて生徒にとって身近な日本の伝統行事について学び、目標意識を持って作業に取り組めるからである。また、自分でハンコを選ぶことで自己決定の機会を設ける。さらに、ハンコ押しでは手指手腕の巧緻性の向上につなげることができると考えられる。

### 8. 指導観

授業の始めの挨拶では、体調確認と共に授業が始まることを意識させるために、生徒一人ひとりと目を合わせて呼名をしたい。また、STと協力して生徒一人ひとりに合わせた言葉かけや個々の生徒に合わせた姿勢や介助方法などの個別の支援を行う。

まず、お正月に関連する絵本をスライドで作成し、読み聞かせを行うことで「お正月とは何か」「お正月には何をするのか」等を知識として知らせ、興味・関心を持たせていきたい。中でもお正月の行事の一つである年賀状について取り上げて、オリジナルの年賀状を作成させる。紙すき体験では生徒が見通しを持てるように、スライドショーを用いて視覚支援を行い、工程を分かり

やすく伝える。紙すきでは、ちぎった紙をペットボトルに詰め込む作業が難しい生徒には補助具を用いる等、活動しやすいように準備を行う。

紙すき体験1回目から3回目は、3つの工程に分かれてどの工程も経験できるように回す。3つの工程をつなげ、みんなで協力をして1つの作品を作ることにより、自分の役割や責任を持って取り組むことができる。

紙すき体験4回目では、今まで体験した工程を一人で行わせる。さらに、一人で作品を作ることにより、完成できた達成感や喜びを感じさせることができるようにしたい。

生徒が主体的に活動に取り組むことができるように自分の好きな色の紙を選び、出来上がった紙に自分で選んだハンコを押す作業を取り入れる等の工夫を行う。授業のおわりには、作業をしている様子の動画や出来上がった年賀状を観てもらって頑張った点を発表し、友だちや教員から評価してもらうことで達成感を味わわせたい。また、友だちの作品を見ることで友だちを意識して関わりを持とうとする意識を育てたい。

## 9. 単元（題材）の評価規準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
①手元を見ながら紙をちぎったり紙をペットボトルに入れたりすることができる。 ②ペットボトルを振ることができる。	①自分の好きな色を選ぶことができる。 ②紙に自分が選んだハンコを押すことができる。	①友だちが作品を発表しているときに、それを観ることができる。 ②年賀状について興味・関心を持ち、年賀状作りに取り組もうとしている。 ③みんなで役割分担をし、積極的に取り組もうとする。

## 10. 単元（題材）の指導と評価の計画（全14時間、本時は第9時）

次	時	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準（評価方法）
1	1	・お正月ってなあに？	・「お正月の本」の読み聞かせを聞いてお正月について興味を持つ。  ・正月のあいさつについて説明を聞き、実物の年賀状を見て次回から何を作るのか知る。	・お正月の曲を流してMTに注目させる。  ・お正月について興味・関心を持たせるために、お正月についての絵本の読み聞かせをする。  ・次回から何を作る	C②



				のか見通しを持たせるために年賀状を見せる。	
2	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>紙すき体験をしよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>紙すきの工程のライドショーを見て、作業内容について知る。</li> <li>「紙をちぎる」「ペットボトルやミキサーに紙を入れる」「ペットボトルを振る」の3つの工程に分かれて、自分の役割を行う。</li> <li>一人で紙すきを行う。</li> <li>半紙とお花紙をちぎる。</li> <li>ちぎった紙をミキサーやペットボトルに入れて混ぜる。</li> <li>混ぜた液をすき枠に流し込み、水気をとる。</li> <li>自分の作業風景や紙すきを見てもらう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>動画は、全員で見られるように、画面の見やすいところに生徒を移動させる。</li> <li>事前に、生徒を「紙をちぎる」「ペットボトルやミキサーに紙を入れる」「ペットボトルを振る」の3つの工程に分けておく。</li> <li>いくつかあるお花紙から生徒に応じて2つか3つ選び、その中から生徒に選択させる。</li> <li>ペットボトルに紙を詰め込む時に補助具を用いて活動をしやすくする。</li> <li>友だちに見てもらっている時に、生徒が頑張ったことやできたことを説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A①</li> <li>A②</li> <li>B①</li> <li>C①</li> <li>C③</li> </ul>
3	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界に一つだけの年賀状を作ろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>出来上がった紙に自分で選んだハンコを押したり絵を書いたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いくつかあるハンコから生徒に応じて2つか3つ選び、その中から生徒に選択させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>B②</li> </ul>

4	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>作った年賀状を發表しよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分で作った年賀状を友だちに見てもらう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>完成した年賀状をiPadを使いモニターに映して、生徒全員に見えるようにする。</li> <li>年賀状を友だちに見てもらっている時に、生徒が頑張ったことやできたことを説明する。</li> </ul>	C①
---	---	---	--	--	----

## 11. 本時の展開

### (1) 本時の目標

- 工程に沿って紙すきを進めることができる。
- 自分で選択したお花紙を用いて作品を作る。

### (2) 本時の評価規準

- 紙をちぎったり紙をペットボトルに詰めたりすることができる。(A①)
- ペットボトルを振ることができる。(A②)
- 複数あるお花紙から自分の好きなものを選択することができる。(B①)
- モニターに映っている友だちの作業風景や出来上がった紙を注目することができる。(C①)

### (3) 本時で扱う教材・教具

500ml ペットボトル、ミキサー、水、のり、計量カップ、半紙、お花紙、補助具、モニター、ホワイトボード、iPad、名前カード、机

### (4) 生徒の実態と本時の目標

(※児童生徒の実態と本時の目標については個人情報が含まれるため省略)

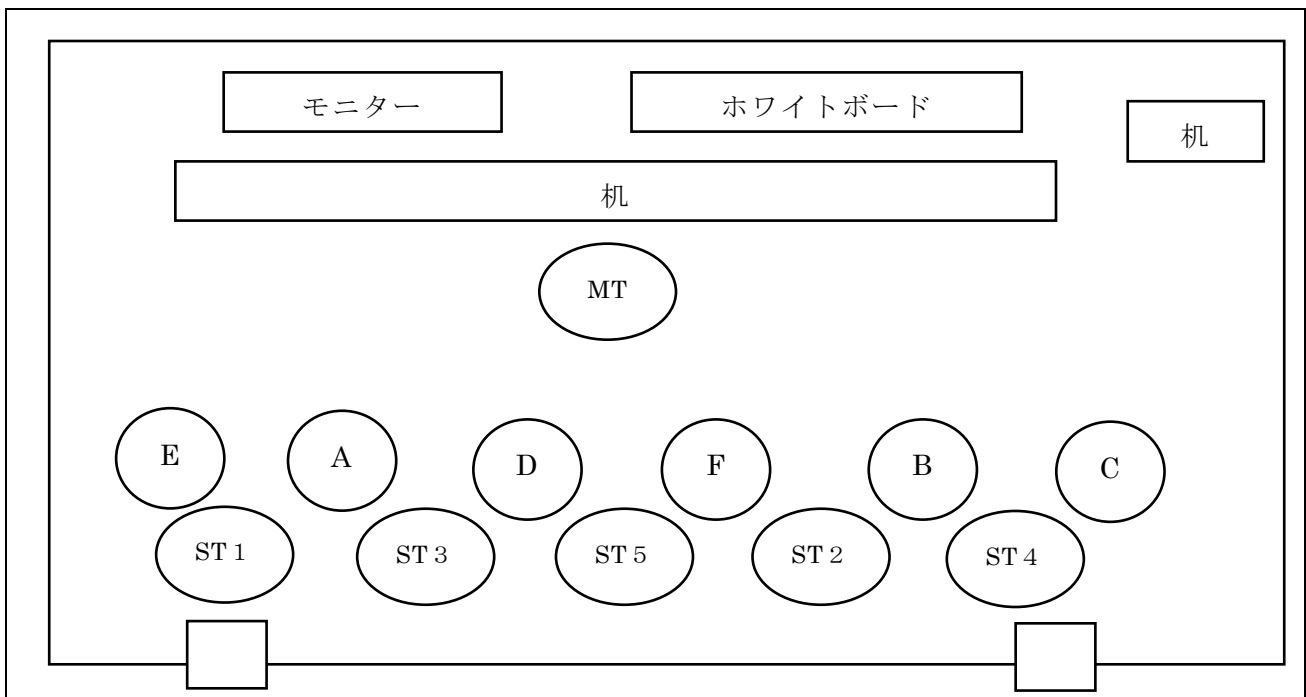
### (5) 本時の学習過程

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び支援の手だて等	評価規準(評価方法)
10分導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>あいさつをする。</li> <li>前回の復習をする。</li> <li>本時の学習内容を知る。</li> </ul>	<p>MT：日直を選ぶ。姿勢を正すように促し、授業の始まりを意識させる。</p> <p>ST：日直が号令をかけ、それに合わせてあいさつができるように促す。</p> <p>MT：あいさつの時に、呼名をして生</p>	

		<p>徒一人ひとりと目を合わせる。 また、体調を確認する。</p> <p>MT：学習内容が視覚的にわかるようにスライドショーを活用し説明をする。</p> <p>MT：タイムキーパーを決める。</p>	
25分 展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな色のお花紙を選択する。</li>   <li>・半紙とお花紙をちぎる。 (5分)</li> <li>・タイマーが鳴ったら、タイムキーパーが教員に報告する。</li>   <li>・教員と一緒に半紙とお花紙をちぎる。</li>   <li>・ちぎった半紙やお花紙、のり、水をペットボトルやミキサーに入れて混ぜる。 (Fは5分間、ちぎった紙を一人でペットボトルに入れて、タイマーが鳴ったら教員に報告する。)</li>   <li>・曲が流れている間、ペットボトルを振る。ミキサーを混ぜ続ける。</li>   <li>・混ぜ終わったらすき杓に液を流し込み、水気をとる。</li> </ul>	<p>MT：様々な色のお花紙を前の机に置いておく。</p> <p>ST：前の机から生徒が好む色を2つか3つ選び出し、その中から生徒に選択を促す。</p> <p>MT：タイムキーパーにスタートボタンを押すように促す。</p> <p>ST：タイマー鳴ったら、どのように伝えればよいのか言葉かけをする。</p> <p>MT：もう1度、5分計る。</p> <p>ST：生徒と一緒に紙をちぎる。</p> <p>MT：水の入った計量カップを6つ用意しておく。</p> <p>MT：半紙やお花紙、のり、水をペットボトル、ミキサーに入れるように全員に促す。</p> <p>ST：ペットボトルに紙を入れるのが困難な生徒は、補助具を使用させて一緒に行う。</p> <p>ST：タイマー鳴ったら、どのように伝えればよいのか言葉かけをする。</p> <p>MT：曲を流す。</p> <p>ST：ペットボトルを振ったり、ミキサーのボタンを押したりすることが困難な生徒は教員と一緒に行う。</p>	<p>自分の好きな色のお花紙を選ぶことができる。【B①】</p> <p>紙を掴んだりちぎったりすることができる。【A①】</p> <p>紙をちぎり終わった後に教員に伝えることができる。【A①】</p> <p>紙をペットボトルやミキサーに入れることができる。【A①】</p> <p>ペットボトルを振ることができる。【A②】</p>

		<p>ST：すき枠に流す時は、生徒と一緒に 行う。</p> <p>MT：生徒の進捗状況を確認する。生徒の作業風景を撮影する。 生徒が取り組む意識を高めるような言葉かけをする。</p>	
10分 まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>頑張った点を発表する。</li> <li>次回の学習内容の説明を聞く。</li> <li>あいさつをする。</li> </ul>	<p>MT：生徒の作業風景をモニターに映す。出来上がった紙を一人ひとりに見せる。</p> <p>ST：頑張った点を発表して、できたことを確認し、自己肯定感を高める。</p> <p>MT：姿勢を正すように促し、授業の終わりを意識させる。</p> <p>ST：日直が号令をかけ、それに合わせあいさつができるように言葉かけをする。</p>	<p>友だちの作業風景がモニターに映されている時、モニターに注目することができる。【C①】</p> <p>友だちの出来上がった紙に注目することができる。【C①】</p>

(6) 教室配置等（正面を上にして、児童生徒や教員の位置、教材・教具の配置等を示す）



#### 4. まとめ

今年度は2つのグループで研究授業を実施し、本篇では「特別活動」で研究授業に取り組んだ。研究授業において今後の授業改善に向けて取り組みたいことなどを本篇のまとめとして記載しておく。

- ・説明時に早口になっていたのでは、生徒が聞きやすいスピードで話す必要がある。
- ・時間を延長してしまったので、今後はポイントを考えて、時間配分を行う必要がある。
- ・ST との連携があまりできていなかった。道具の準備等を ST に行ってもらったり、MT と ST の動きをしっかりと分けておいたりする必要がある。
- ・生徒が個々にペットボトルを振っている時、友達を意識できるように、横一列ではなく U 字型または 2 ～ 3 人一組など隊形を変化する。
- ・水を入れる時、取っ手付きのボールを使ったほうが良い。生徒が主体的にできるように考える。もし、個数が不足している場合は、入れ替わりで使ってもよい。
- ・コロナ禍であることを踏まえ、衛生面も考慮して授業を進める。

## 高等部

### 1. テーマ

全校テーマ『子ども一人ひとりの実態を小学部から高等部でとらえ、未来に活かす力を育む』を中心として、高等部では「発達段階に応じた指導・支援を行い、社会に順応する力を育む」ことをテーマに学部研究を実施した。研究討議、[岸和田支援学校授業観察票]等で意見交換を行い、今後の学部全体の指導の充実に役立てることをめざした。

### 2. 内容

高等部では、教員が所属する学年以外の生徒についても理解を深め、関わりを持つ指導体制をとっている。このような指導体制は、学年を越えた縦割りの学習グループ(班)での指導にとっても有効であり、効果的なチーム・ティーチングを行うため、部会や班会での報告等を通して、日々生徒の実態把握に努めて授業を行っている。

学部研究では、実際の授業を撮影したビデオを見ながら、学部全体で気がついた点を共有している。自分が関わる授業では見えてこない生徒の姿や授業担当者のチーム・ティーチングの取り組み等指導の工夫を知ること、授業改善をしていく機会になっている。

昨年度に引き続き、今年度も学習指導案作成のための検討会のメンバーを各教科の教員を中心に構成し、各教科の専門性に重点をおいて授業内容を検討した。

### 3. 高等部Ⅱ班美術「羊毛フェルトで花畑を作ろう」

ここでは4回実施した学部研究の中から紙面の関係でⅡ班美術の授業に焦点を当て、研究の成果と課題について整理していく。

Ⅱ班美術の授業者は、学部テーマをもとに次の2つの視点を重視して授業を計画した。

#### ① 生徒の主体性を大事にした授業づくり

これまでの授業では、色や飾りを教員が用意したものの中から選ぶことはあっても、自分自身で作品の構図を考える制作が少なかった。そこで、自分が成形したフェルトから連想して植物に見立てながら貼り付ける学習展開にすれば、発想や構想にも比較的考えやすく取り組み生徒の主体性を育めるのではないかと考えた。

#### ② 他の生徒と共同して取り組むことをめざした授業づくり

生徒が台紙に作ったフェルトを花びら・実・葉などに見立てて貼り付ける活動をする。それを一つの作品として大きな模造紙に、構図や構成を意識し、生徒同士で協力して作り上げていく。この活動を通して、生徒同士の共同性が深まるのではないかと考えた。

以下に、学習指導案の一部を示したうえで、研究協議での内容や授業者の振り返り、単元終了後の授業者の省察についてまとめていく。

学習指導略案

「高等部 II 班」(美術) 学習指導案

1. 単元(題材)名 「羊毛フェルトで花畑を作ろう」

2. 単元(題材)目標

- ・素材の特性を味わいながら、植物をモチーフに、花びら・葉・実など表したいパーツに合わせて手のひらや道具を使って加工し、表し方を工夫する。(知識・技能)
- ・造形的なよさや美しさについて考え、構想を練りながら制作する。

(思考力・判断力・表現力)

- ・進んで制作活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育む。

(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元(題材)の指導と評価の計画(全24時間、本時は第15時)

次	時	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準(評価方法)
1	1	・フェルトについて学ぶ	・素材の特性、製品や作品、加工する方法を学ぶ。	・写真や実物を提示し、視覚的に理解できるようにする。	A①行動観察
2	2 ～ 10	・原毛に触れる ・加工の体験をする	・道具を使いボール状に成型する。 ・手でこすってシート状に成型する。 ・手で転がして団子状に成型する。	・いくつかの加工方法を体験させることで、自分に合った方法を選択できるようにして、自らの手で素材を色々な形にできることを実感できるようにする。 ・自由な形に作ってよいことを伝える。	A②行動観察
3	11 ～ 14	・成形したフェルトを用いて、個人作品を制作する。	・前次に制作したフェルトを、植物に見立てながら台紙に貼り付ける。	・本次の導入で、植物について学習する時間をとる。 ・共同制作に取り組む前に個人作品を作ることで、自分が作った形をなにかに見立てながら制作することに慣れられるようにする。	A②行動観察 C①行動観察

4	⑮ ～ 18	・原毛を成形する。	・原毛を手のひらや道具を使って丸めたりシート状にしたりと様々な方法でフェルトに成形する。	・自由な形に作ってよいことを伝える。 ・自分に合った制作方法を選択することができるように、事前にどのような制作方法があるかを振り返る時間をとる。	A②行動観察 B①行動観察 C①行動観察
5	19 ～ 23	・グループ全員で大きな台紙に貼り付け共同作品を作る。	・前次に成形したフェルトを植物に見立てながら貼り付け、共同作品を制作する。	・本次の導入で、平面の構図構成について学習する時間をとる。 ・全体の構図を考えながら制作できるように、見る距離を変えたりして全体を見渡せるようにする。	A②行動観察 B②作品 C②行動観察
6	24	・鑑賞	・完成した作品を良いところに注目しながら鑑賞する。	・良いところに気づけるように言葉がけする。	B①行動観察

#### 4. 本時の展開

##### (1) 本時の目標

- ・自分の特性に合った方法で、素材を成形する。
- ・積極的に制作に取り組むことができる。

##### (2) 本時の評価規準

- ・自分の特性に合った方法で素材を成形することができている。【A②】
- ・決められた時間中、作業に集中し意欲をもって制作に取り組むことができる。【C①】

##### (3) 本時で扱う教材・教具

- ・原毛 ・ハンドソープ ・ぬるま湯 ・フェルトボールメーカー ・ハンドタオル
- ・ボウル ・ビニール袋 ・スプレーボトル ・マスキングテープ ・タブレット端末
- ・鉢底ネット



(4) 本時の学習過程

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び支援の手だて等	評価規準(評価方法)
10分 導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ はじまりの挨拶</li> <li>・ 前回までの振り返り</li> <li>・ 本時の学習内容について</li> </ul>	<p>MT：全員が MT に注目するように促す。</p> <p>MT：てのひらで握る、転がす、平たく伸ばす、道具を振って丸めるなど様々な方法があることを振り返り、今回どの方法で取り組むかを選びやすいようにする。</p> <p>MT:今後の授業で共同作品を作るうえで、今回作る作品を植物のどの部分に見立てて貼り付けるかということや、自分にとって取り組みやすい方法をイメージしながら制作できるように言葉がけをする。</p>	
25分 展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ フェルトを成形する</li> </ul>	<p>MT：・ 本時の目標をそれぞれの生徒に言葉かけする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒がどの方法で取り組むか迷っている場合は、言葉がけをして選びやすいようにサポートする。</li> </ul> <p>ST1：・ 音楽をかけることで作業に変化をつけ、集中力が保つようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ タイマーを提示し、作業に見通しがつくようにする。</li> </ul> <p>ST/MT：・ 会話を通して作業に意識が向くように支援する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支えることが難しい場面の補助をする。</li> </ul>	<p>A②行動観察</p> <p>C①行動観察</p>
10分 まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 鑑賞</li> <li>・ 予告</li> <li>・ 終わりのあいさつ</li> </ul>	<p>MT：次回の制作につながるように、良いところに着目しながら言葉がけをする。</p> <p>MT：見通しが持てるように、次回の授業を予告する。</p> <p>MT：全員が MT に注目するように促す。</p>	<p>B①行動観察</p>

本時の研究授業では、視点①視点②を踏まえ、共同制作に向けて、それぞれの生徒が「どのパーツを」「どの色で」「どのような方法で作るか」を考えて個人で制作していく学習活動を展開した。

## 【振り返り】

### 視点①

- ・フェルトを成型する方法を複数提示することで、それぞれの生徒が自分で選択し活動に主体的に取り組むことができた。
- ・主体性を育てるためには、より生活年齢にあった教材の検討が必要であった。

### 視点②

- ・本時の授業では、生徒たちに花に見立てるという題材の難易度が高く、共同性までを十分に意識させることができなかった。導入やまとめの方法を検討する必要がある。

## 【研究討議提案】

### 視点①に関して

- ・(羊毛フェルトが縮絨がしやすくするために、スプレーを吹きかけることについて)  
MTが吹きかけていたが主体性の観点から考えると生徒が自分でしたほうがよかったのではないか。
- ・学習の途中で、お互いの学習成果を見あったり触ったりすることで、友だちの作品の良いところを真似したり友達の頑張りを認めたりして、より意欲的に取り組めるのではないか。

### 視点②に関して

- ・生徒が一つの作品をみんなで作ることを意識できるように、導入時に大きな模造紙を提示したほうが本時の学習活動が明確になったのではないか。
- ・鑑賞時に、個々の作品を見せあうだけでなく、実際の模造紙を背景にすることで、次時に友だちの作品を意識しながら、自分の作品が作れるようになるのではないか。

## 【単元を終えて】

繰り返し取り組む中で生徒が見通しをもつことができたことにより、リラックスして学習に取り組めるようになり、フェルトから構想を広げることができた。また、共同性に関しては授業の回数を重ねるごとに、赤の隣だからオレンジにしようという声や寂しい感じがするからここに貼ろうなど自分で考えて活動する姿勢が見られた。今後、生徒ひとりひとりが自分なりの表現ができるような教材や指導方法の研究を積み重ねてさらに生徒の主体性や共同性を育てていきたい。



写真-1 フェルトの成型



写真-2 フェルトの成型



写真-3 フェルトの貼り付け



写真-4 第5次の共同制作

#### 4. 次年度に向けて

今年度の研究テーマについては2年目の取り組みになる。学部研究を通して、生徒が主体的に学習に取り組めるようにするために、わかったことできたことが実感できるような教材の工夫の重要性が確認された。また、導入時に、生徒が学習課題を掴めるような指導も、生徒の主体性にとって大切なポイントであるとの指摘もあった。

来年度は、全校テーマをさらに深めた学部研究が課題となる。公開授業週間やシラバス等を活用し、学部研究を深めていく。

## IV. テーマ研修

### 1. 概要

テーマ研修は、研究部が主催する全職員の学びの場である。全職員からテーマを募集し、変化の激しい教育現場に役立つ内容を学ぶ場として年2回開催する。今年度のテーマは、昨年度から引き続き「自立活動」と、今年度から小学部で使用開始になった「新学習指導要領」に定めて2回実施した。

### 2. 実施日時と内容

#### (1) 第1回テーマ研修会 令和2年8月4日(火)

題目：「知的障害教育における指導の手立てと学習評価～集団化と個別化を追求して～」

講師：石塚謙二氏（桃山学院教育大学）

新学習指導要領の改訂ポイントや学習指導要領を引用し、我々教員がどのような指導をするべきかの講義だった。新学習指導要領には合理的配慮の記載があるが、まずは、子ども一人一人のねらいを具体的にはっきりさせ、そのねらいを達成するために配慮や支援を行うことが重要であると話された。どのように学び、何ができるようになったかを大事に指導にあたり、指導後は、ねらいを達成できたか、達成できなかった場合には何が悪かったのかなどを論理的に検証する必要があると話され、改めて自分たちの指導を見直すきっかけになり、初任者や経験年数の若い教員にとってもどのような視点で指導に当たればよいかを学ぶことができた。

#### (2) 第2回テーマ研修会 令和2年8月6日(木)

題目：肢体不自由児への前言語期からのコミュニケーション発達援助

講師：木村秀生氏（大阪河崎リハビリテーション大学）

自立活動「コミュニケーション学習」の講師として、本校の福祉医療関係人材活用事業での特別非常勤講師の木村氏に講義を依頼した。まずは、コミュニケーション援助の基本姿勢として、環境を整えることやイーコール・イニシエーター（子どもと大人が対等な立場）になることについて学んだ。その後、乳児期初期段階のコミュニケーション発達援助例を4ケース、乳児期中期段階のコミュニケーション発達援助例を1ケース、就学までに伝達手段として「ひらがな」を獲得した「重度重複」障害児を1ケース、映像を交えて詳しく説明してくださった。映像トラブルで全てのケースを映像では見られなかったが、指導の経過を順を追って説明していただき、コミュニケーション指導の進め方を学ぶことができた。

### 3. 研修を終えての感想

各研修会后、アンケートを行った。第1回のアンケートでは、「今後の授業づくりに役立つ内容だった。」「自分の授業の在り方を見直す機会になった」「支援教育や教員の在り方について改めて考える機会になった」「子どもが持てる力を発揮できるよう力を注ぎたいと思う」など、今の自分を振り返る機会になったという意見が多かった。その他「特別支援教育は小中学校の方が大変進化していることを我々も自覚していかなければと思った」「センター的機能と同時に専門性の向上が求められると思う」など、支援学校がセンター的な役割を地域の小中高等学校に対して果たしていかなければならないという意見もあった。第2回のアンケートでは、「子どもの意図を途切れさせず行うことが大切であること、できないと決めず行ってみて可能性を信じるのが大切だと思った」「ST＝言語＝口からの言葉、反応で文字を選ぶのイメージで固まっていたので、まだできることはあると感じた」「改めて自身の指導を振り返ることができた」などの意見が多く、コミュニケーション指導の在り方などを学ぶことができたようだ。

### 4. 次年度のテーマ研修会について

分野を問わず、本校教員に必要なテーマを募集して行う本研修は、アンケートの結果からその内容への肯定的な回答が多かった。第2回テーマ研修会の講師の木村氏のように、本校の児童生徒の実態を知っておられる方の実践を交えての講義は分かりやすく、今後の指導に生かされる意見も多いため、次年度は、作業学習分野の特別非常勤講師としてお願いしている島氏に講義を依頼している。また、例年のテーマ研修会と進め方を変え、本校児童生徒を事例にあげ、教員の指導方法などを本校教員と島氏で深めていくことを計画している。

## V. 校内教材交流会

例年、夏季休業中に実施していたが、今年度は短縮授業の生徒下校後7月30日に行った。コロナ対策として、教室の広さに応じて入室人数を決め、入り口の人数カードで把握、消毒アルコールを置くなどの配慮を行った。

1. 目的 教材や実践の紹介、交流を行う場として開催する。

日頃の実践のまとめの場や、今後の実践に役立てる場とする。

2. 教材コーナー・・・表-1★マークの教材について、写真をまじえてコーナー紹介をする。

表-1 教材コーナー開設表

学部		教材名
小	★ずこう	絵具で遊ぼう
	★おんがく	オリジナル楽器
	★たいいく	ボールスライダーあそび
	せいかつ	とうもろこしを育ててポップコーンを作ろう
	クラブ活動	列車を作って遊ぼう
中	★理科	太陽系の惑星模型
	自立活動	xR教材と楽スタを活用した実践例
	基礎等	xR活用教材
高	課題	紙すき教材
	みるきく	みるきくの教材
	訪問	高等部訪問の教材

### 1. 絵の具で遊ぼう…小学部ずこう

キャスターで後ろに進みながら、大きな模造紙に絵の具で足形をつけていきます。自分がつけた足形を見ながら進むので子供たちが活発に活動できました。(写真-1)



写真-1

## 2. オリジナル楽器…小学部おんがく

「おんがく」の授業や学習発表会で子どもたちが楽器を演奏する時、最大限に自らの力を発揮して(できるだけ教員の支援は少なく)音を出すことができればいいな…そんな思いからうまれた工夫を紹介します。子どもたちの興味、関心を大切にしつつ、一人ひとりの実態に合った小学部のオリジナル楽器です。  
(写真-2)



写真-2

## 3. ボールスライダーあそび…小学部たいいく

低学年・自立活動(うごく)の授業で使用しました。カラーボールを敷き詰めた上を段ボール板に乗って移動することができ、前後、左右、回転などスピードも調整しながら、いろいろな方向へ動かし、バランス感覚等を養う事が期待できます。箱からひもを引っ張ってボールを落とす活動も取り入れました。

(写真-3)



写真 -3

4. 太陽系の惑星…中学部理科…学校から空そして宇宙にとび出して地球を眺めてみよう。(写真4)

- (1) Google Earth の画像を参考に、地球からとび出す。
- (2) 地球の大きさを直径 1 c m の球に縮小した場合に、太陽やその他の惑星との大きさや距離を概略計算してみる。
- (3) およそ 100m の直線距離が見通せる所が岸和田支援学校の校舎内にある。どこかな？行ってみよう。

※岸和田支援学校では体育室の入り口を起点に、運動学習室までを観察地点とする。直径 1m のボール (Physioball) を体育室入口に置き(写真 A)、水星、金星、地球までの距離を示す所に惑星の模型を配置しておきます。

- (4) 地球の位置に立ち、目から約 30cm 離れた所 で太陽に向けて月の模型をかざすと、太陽と月はほぼ重なり、同じ大きさに見えることを観察する。(日食の現象)



写真 A

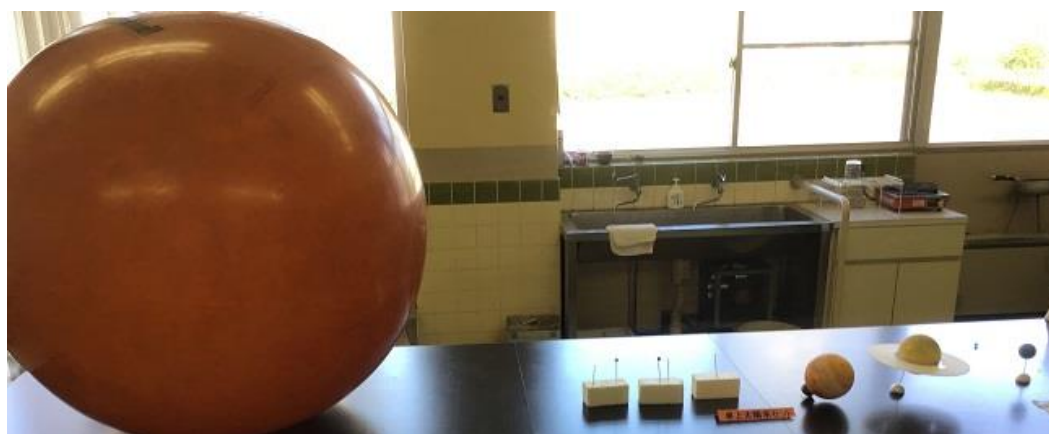


写真-4